

## 花粉症、この奇妙な病気～トピックスとマネージメント

東北医科薬科大学 耳鼻咽喉科教授 太田伸男

近年、アレルギー性鼻炎の有病率が上昇しているだけでなく、発症の低年齢化が指摘されている。国民の **25%**以上がスギ花粉症に罹患しており、特に若年層ではスギ花粉に対する抗体の保有率が **50%**を超え、その半数は実際に花粉症の症状を発症している。**Local allergic rhinitis** という新しい疾患概念も欧州から提唱されている。鼻汁中に好酸球は存在するものの血液検査や皮膚テストでは抗原が特定されないもので好酸球増多性鼻炎と似ているようだが、鼻汁中に抗原特異的 **IgE** が認められ抗原誘発反応が陽性であることから鼻腔に局限した感作である可能性が示唆されている。この病態の理解と適切な診断方法の普及も重要になっている。症状を抑制するためには抗原回避が最も重要であり、抗原の特定は患者の生活指導の上でも重要である。しかし、実際には薬物治療が中心となっているのが実情である。薬物抵抗性の症例に対しては外科的治療も適応となる。また、寛解を目指すアレルゲン免疫療法のラインナップに舌下免疫療法も加わり、その治療の効果にも期待と注目が集まっている。花粉症の治療効果の判定には鼻症状や鼻所見などの総合的な判断だけでなく、患者満足度や **QOL**の向上も考慮する必要がある。アレルギー性鼻炎の低年齢化が進行している今日、残念ながら自然寛解の少ない疾患であることを患者に認識させ、症状、重症度に応じた対応法の確立に患者自身も積極的に参加するように意識を高めていくことが重要である。本講演では、花粉症のトピックスとマネージメントについて概説したい。